

<テーマ>

## 子どもとおとなの居場所づくり

—家庭を支える地域の教育力を考える—

|          |                           |                        |
|----------|---------------------------|------------------------|
| 日 時      | 平成10年5月29日(金) 13:30~16:00 |                        |
| 会 場      | セシオン杉並 展示室                |                        |
| 講 師      | 天野 正子                     | お茶の水女子大学               |
|          | 清水 弘司                     | 埼玉大学助教授                |
|          | 二瓶由美子                     | 元日本PTA全国協議会母親委員長       |
|          | 天野 秀昭                     | 世田谷ボランティア協会プレーパーク担当専門員 |
| コーディネーター | 中野 洋恵                     | 国立婦人教育会館事業課研究員         |

○中野洋恵(国立婦人教育会館事業課研究員): それでは、『子どもとおとなの居場所づくり—家庭を支える地域の教育力を考える—』をテーマに公開シンポジウムを始めます。

国立婦人教育会館では、平成8年~9年度にかけて「都市化社会の進行と家庭・地域の教育機能に関する調査研究」を実施いたしました。今日はこのプロジェクトでご研究いただいた3人の先生によるそれぞれの視点からの報告と天野秀昭さんの実践事例報告を交え、調査研究の一端をご報告いたします。

1人目は、お茶の水女子大学教授天野正子さんです。天野正子さんには、プロジェクトの座長として中心的役割を担っていただきました。本日は調査研究の中から「地域の教育力」を創り出す試みの実践事例として「父親の居場所づくり」を中心に報告していただきます。2人目は「学校と地域」というテーマで埼玉大学の清水弘司さんに、そして、PTA活動を通しての報告を元日本PTA全国協議会母親委員長の二瓶由美子さんから報告をしていただき、最後に世田谷ボランティア協会の天野秀昭さんから「世田谷プレーパーク」と「チャイルドライン」という新しい試みについて御報告をいただき、会場の質疑でさらに深め、最後に各パネリストによるまとめという形で進めてまいります。

### 「地域の教育力」と「父親の居場所づくり」

○天野正子(お茶の水女子大学教授): きょうの総合テ

マは「子どもとおとなの居場所づくり—家庭を支える地域の教育力を考える—」です。初めに、少々かたい話になりますが、ここでのキーワードの、「居場所」「地域」それから「地域の教育力」について、簡単に説明しておきましょう。

まず、「居場所」という言葉を、外部の管理の目から自由な、安全な空間という意味で使いたいと思います。その空間を確保することによって、私たち一人ひとりほっと息をつき、自分自身の存在の意味をとり戻し、自分と「他者」との距離のとり方を回復できるのですね。自分が主人公になって創る空間といいかえてもよい。中世社会史のなかで発見された「アジール」(避難所)や「無縁」(権力が介入できない一種の聖域)という言葉に通じるものとして、いや、それよりもっと広い意味をもつ言葉として使っています。

そうしたおとなと子どもの「居場所」につながる「地域」の意味ですが、ここでは学区や行政区のような固定的な空間をさしていません。家庭と社会システムとの中間にある、人びとが共に生活する場という程度の、あいまいなとらえ方をしています。

では、その「地域の教育力」とは何でしょうか。私たちは、地域というのは、子ども・おとなを問わず、それぞれの自己成長や自己形成に大きな影響力をもっていると考えています。つまり自己形成空間として地域のもっている影響力を「教育力」ととらえたい。地域は、土地柄と呼ばれる自然環

境、長年の暮らしが生み出した年中行事や祭りなどの歴史・文化的な産物、地域を舞台にくり広げられる人々の「つきあい」やネットワークなど、いくつもの層をもっています。自然環境や歴史・文化的な環境は大切ですが、それらはそれ自体として、地域の教育力を発揮することはできません。自然や文化の伝統をとらえるまなざしや、それに働きかける力が子どものなかに育たないかぎり、地域を自己形成空間へと変換することはできません。

年齢や属性など同質性の強い学校や企業空間と違って、地域は異質性にあふれた空間です。さまざまな年齢や役割の人たちがいて、考え方や感じ方はもちろん、知力・体力・経験もみんな違う。そうした多様な人たちとのやりとり(相互作用)のなかで、子どもたちは人への対し方や人の期待へのこたえ方、人間関係をつくる力を習得していく。それは、人間関係のやせ細った家庭のなかでは体験しにくいものです。自然や伝統を子どもやおとなの自己形成空間に結びつけていくのが、こうした人と人の結びつきとしてのつきあいやネットワークなのです。こうした地域の教育力を創りだす試みを訪ねて全国を歩いた結果、私たちが出会ったいくつかの多様な実践例をこれから紹介し、それを素材にみなさまと議論できたら、と思います。

事例のうち、私が報告するのは、「父親の居場所づくり」です。地域のなかで子どもとむきあうには、なによりも地域という暮らしの舞台に父親たちが居場所をつくり、父親自身が楽しむことだ、と始まった実践です。

1990年前後から都市型社会の中で子育てを考え、参加する父親たちの動きが目に見える形で登場してきました。ただ、多くの場合、そのネットワークは消えては現れ、現れては消えるという短命なものです。ところが、「すぎのこおやじの会」というのは、既に23年の長命、長寿を保っております。なぜ、長く続いているのか、今後、どうなっていくのかという点に、焦点をあててお話ししましょう。

「すぎのこおやじの会」は、横浜市戸塚区の約1800世帯の高層住宅団地に住む父親たちのネットワークです。今から23年前、団地の母親たちが自主保育園を作りました。そのときに、動物小屋、遊び道具、遊具作りに父親たちを大いに当てにして、半強制的にかり出しました。その経験が、父親たちにとっては思いがけずおもしろかったんです。職場では使うことのない筋肉、そして知恵と技術をフルに使う。また、家庭の外でのわが子の素顔に接するおもしろさも経験しました。遊ぶことの楽しさを知った父親たちは、子どもたちが卒園してもこの楽しさを失いたくない

と考えて「すぎのこおやじの会」をスタートさせました。

この会の特徴をあげると、まず第1にメンバーの口から「子どものために」という言葉が出てこないことです。出てくるのは、「まず父親である自分が楽しみたい」、「自分が楽しくないと続かない」、「自分の息抜きの場」などです。〇〇のためにという、つきつめた感じがありません。

2番目に、会のルールもリーダーシップも非常にあいまいだということです。常連のメンバー約50人が自由自在に参加しています。平均年齢は47～48歳の会社員。メンバーの多くは、「おやじの会」に入る前のセブン・イレブン型(朝7時に出て、夜11時頃に帰ってくるような働き方)から自らを次第に解放してきたそうです。「おやじの会」は様々な活動種目を持っています。コーラスのうまい人が男性コーラス部を作って入園式とか卒園式とか高齢者施設の訪問に出かけていく、借りた田んぼで無農薬米を作って餅つきをする、無線資格を取りたい子どものための講習会やワープロ講座を開く、あるいは子どもを連れて銭湯巡りや釣りをするなど、メンバーが一斉に同じ活動をするのではなく、自分の得意なところで参加する。いわば「餅は餅屋に」方式なのです。会則はもちろん、会費もありません。年に7、8回行われる町の祭りの神輿担ぎのお礼、バザーやフリーマーケットの利益を運営に当てています。

3番目の特徴として、この会が暗黙の形で目指しているものがあるとすれば、「地域の社会的なオジサンになろう」ということです。子どもの成長にとって大切なのは、親子というタテの関係、きょうだいというヨコの関係ではない、気軽に相談できるおとなと子どもの中間にあるナナメの関係です。良いことも教えるけれどもちょっとしたいたずらや悪だくみも教える、悪いことも子どもの成長にとってはある意味で重要です。このナナメの関係は現在、子どもたちの周りから消えています。ややもすれば親は親としての責任感の強さから「躾ける」「教育する」という思いが前面に出て、真正面から子どもに熱い眼差しをかけがちです。「社会的なオジサン」はこれとは違って気軽な相談相手になります。地域の中に親とは違った立場で自分を肯定的に受容してくれる人、そうした社会的なオジサンの存在は、子どもの日常生活を楽しくするだけではなく、他者への信頼感を育てる基盤になっていくのではないかと思います。

私は、今の子どもたちは、「個と集団」の関係について非常にデリケートな感受性を持っていると思っています。大まかにいって、貧しかった時代に育った私たちの世代は集団主義でやってきたのですが、豊かな社会に生きる

彼らは、集団主義になじめず、なによりも自分が他者に正当に承認されているかどうか深い不安を感じている。ですから、この自分を認め丸ごと受け入れてくれる、肯定的に受容してくれるという関係をとても欲しているのです。親に告げ口をしないというのが社会的なオジサンの最大の資格要件だそうです。家庭との連携も下手をすれば、地域と家庭が手を取り合って再び子どもをおとなの監視下に置く危険性ははらんでいます。だから親に対して「秘密」を共有する関係を持つことで社会的オジサンと子どもの距離が一気に縮まるのです。同様に、学校との連携も禁欲してきました。何よりも学校で居場所のない子どもたちに地域での居場所を与えたいと願っているからです。もちろんメンバーの中から、PTAの役員や青少年指導員になる人も出ています。けれども活動の基本は、学校や家庭と連携して「教育的配慮」を前面に出す前に、子どもたちがそうした学校的な価値から解放される、あるいは親の教育愛という熱い眼差しから逃れてホッと息をつく、憩う、あるいは自分を立て直すためのスペース作りというところに置かれているように思いました。

このような関係づくりが子どもたちにどんな影響力をもつかという点では、「何とも心許ない」そうです。関係づくりの成果が出るまでには時間がかかるからです。教育目的を掲げて子どもと真正面から向き合っていく前に、まず親が群れあって楽しむ「横顔」を子どもが見て、何かを感じてくれればいいのだと考えています。つまり、「おやじの会」は、父親自身の居場所づくりを前面に出して、それが結果として子どもの居場所づくりに一役買っている。子どもの居場所とおとなの居場所は地つづきなのだという考え方が基底にあるのではないのでしょうか。

最後に、23年目を迎えた「おやじの会」も少しずつ方向転換を図ろうとしておりますので、その点について若干ふれておきましょう。1つは、「おやじの会」は父親自身が楽しむことをねらって出発したのですが、そこから少しずつ脱皮し始めているようです。父親の「遊ぼう会」として始まった「おやじの会」は差し入れに現れる母親をまきこんで「夫婦で遊ぼう会」へと発展し、そして団地内の親の繋がりがから、困ったときにすぐに対応しあう家庭相互の関係づくりへと進んできました。問題はここ先です。これから考えているのは「地域で遊ぼう会」ということでしょうか。例えば町の探検ウォーク、地域のリサイクル運動とか高齢者への給食サービスなど、自分たちにとっての老後の安住地づくり、暮らしていく上で快適な生活圏ネットワークづくりへの展開が考えられています。

また、行政との関係をどう作るかも課題になってきました。「おやじの会」は、これまで意識的に行政組織との距離を取ってきました。何よりも自分たちのやりたいことを、1人1人の都合に合わせてやりたいからです。しかし、リサイクルや生活環境、高齢者や障害者の暮らしに目を向けて町づくりへ視点を移していくと、どうしても社協や行政など、ほかの市民団体と関わったり、専門家の知識や技術を借りる必要もでてきます。「おやじの会」の持ち味であるのびやかな柔軟性を保ちつつ、行政といかにパートナーシップを組んでいくかが大きな課題になっています。

もう1つ、この会の抱えている大きな悩みは、メンバーが50名を越えて広がらないことにあります。結束が強く外から見るといかにも楽しそうなのですが、それだけに新たなメンバーが参加しにくい雰囲気が出てきたということです。あるメンバーがいうには、この団地内にも様々な個性を持った人がいるので、誰かが仕掛け人、あるいは地域リーダーになって、小さな「おやじの会」がいくつも出来たらいいと。仕掛ける人があちこちに現れることが地域の教育力の活性化の条件につながっていくことなのではないでしょうか。

## 学校と地域

○清水弘司(埼玉大学助教授):引き続き私の担当いたしました「学校と地域」ということで話します。かつては、学区があって、地域の中に学校があるという感じでした。現在は、地域社会が崩壊しているといわれますが、それを考えると、むしろ学校が地域を作り出していく立場に立っているのではないのでしょうか。

私は2つの小学校、1つは、千葉県幕張の新都心、平成7年に開校した打瀬小学校、もう1つは、宮城県白石市という地方の城下町にある、昭和29年に開校し平成8年に改築された白石小学校で話を聞きました。この2つの小学校の共通点は従来あった日本の学校とは建物が違うということです。打瀬小学校はいろいろなところで紹介されていますのでご存じの方もいるかもしれませんが、周りに塀がないのです。塀がないので、誰でもすぐ入れます。校舎は、外から見えるようにガラス張り、教室と廊下との間にも壁がなく、中はすぐ隣の教室と行き来ができるオープンスペース、外から丸見えで、しかも中の風通しもいいといったところでしょうか。設計をしたのは、小島さんという建築家ですが、彼は、建物が変わっていくと、人の行動も変わっていくだろうと考えたのです。学校の中の影の部分はなくし、建築が教育に対してどのように貢献できる



かを考えたということです。

白石小学校は、北山さんという建築家の方が設計したのですが、同じように周りに塀はありません。木が少し植えられていて、1階建ての校舎からはすぐ外に出ることができ、外からよく見えます。教室の壁は全部引き戸で全部開けると屋根だけが残るような形になっています。「開かれた学校」ということはよくいわれますが、この2つの学校に共通するのは、建物自体が開かれているということです。その違いは、幕張は新しいところに出来た新設校であり、白石は人口4万の地方の伝統校だということです。建物が行動を変えることがどういうことなのか興味を持ちました。

打瀬小学校は基本的に新しい学校ですから、何でも新しく作っていかねばならない状況でした。例えば校歌を作ったり、校章を作ったりします。校章は子どもが考えたものに、子どもが人気投票して、よかったものを地域に住んでいるデザイナーが手を入れて直すという形で作られたそうです。そのデザイナーはその地域に住んでいるだけであって、子どもの保護者ではないそうです。校歌についても、その地域に住んでいる人に手伝っていただいたそうです。それがなぜ可能か、ここが大事なところだと思うのですが、「学校便り」はふつう学校から在校生に向かって配られます。ところが打瀬小では在校生に配るだけではなくて、地域の住民全部に配っています。余計に印刷して全戸に配るということですから大した問題ではありません。けれども大きな効果があります。地域住民すべてに打瀬小学校の子どものためにできることはないかと問いかけているのです。

すると、校歌や校章を作るときに、「私はこういう仕事をしているからこれを手伝いましょう」という人が出てくる。

地域には、音楽が得意な人、スポーツが得意な人、陶芸が得意な人など様々な人がいます。そうした人々にクラブ活動、あるいは生活科の授業を手伝っていただく。在校生の保護者だけでなく、地域住民の協力という形をとっているところがすばらしいと思いました。運動会には、地域住民向けのプログラムを考え、学年割りではなくて地域割りというんでしょうか、そこはマンション群ですから街区のグループを作り、保護者もそして地域の人々も入ってもらっているのです。もう1つ、授業参観はどこの学校でもやることですが、ここでは授業参観の日時も学校便りに載せています。それで「誰でもいらしてください」、つまり子どもがいてもいなくても、授業を見に行けるということです。授業を2日間、まったく自由に見てもらおう。そしてその後「教育を語る会」、PTAの会とか、父兄会、保護者会ではないんです。「教育を語る会」という形にして、その地域住民に、打瀬小学校の教育に参加していただく。そこで、日頃の小学校のことに限らず、思っていることを話していただいたということです。こうした取り組みによって、住民は自然に学校に目が向き、子どもに目が向く。人間には自分の中にある能力を最大限に生かしたいという気持ちがありますから、それを子どものために生かすことにつながっています。

白石第二小学校は、私が行きましたときには、落成してから半年しかたっていませんでしたので、今までの学校と建築物が違うことで、使う先生のほうがとても戸惑っていたようです。先生に聞きますと、「最初は監視されているような気になった」そうです。外から丸見え、隣の先生からも丸見えで、何をやっているかみんな見えてしまうのです。でも次第に、「周りで見ている人がいるんだから、助けてもらえばいいんだ」という気持ちになったというこ

とです。白石小学校は、学校を作るときに子どもが参加したことが大きな特徴です。日曜日にPTAの会合を開いて、親や建築家の前で子どもが「こういう学校を作ってほしい」というプレゼンテーションをしました。1年生の子どもは絵をかく、高学年は模型を作るというような形で、学校作りに参加しました。“新しく学校を建てる”というコンセプトから子どもの参加が可能になったのです。

この2つの事例から私なりに考えたことは、まず第1に、学校が新しい町のコミュニティ形成に寄与するという事です。さきほど申し上げた「学校便り」の配付によって、地域住民が学校を身近に感じると同時に、地域に対する愛着を持つようになります。そして学校に地域住民が参加することによって、学校が地域住民の交流の場になります。

2番目は、学校の構造が教育を変えるということです。最近、パブリック・ゾーンと学校の施設が分けて考えられるようになってきました。例えば体育館、プール、家庭科室などを1か所にまとめて、外から自由に利用できるようにするという構造ができています。建築家に何うと、建物をデザインするんじゃなくて、人の行動を分析して、個人の行動をデザインしようとしたということです。打瀬小学校の場合、まず体育館があります。みんな学校に来るときは体育館を通ってくる。体育館は何時から何時しか使っちゃいけないということはありません。みんなそこを通ってくるんだから、誰かの目が必ずそこにあるんだから、好きなときに使いなさいということです。コントロールするのではなく、自由度が増す構造になっています。3番目は、施設を有効に使うためには利用者の発想の転換が必要だということです。建物だけがオープンになっても、使う人の気持ちがオープンにならなければ、うまくいかないのです。日本では20年前からオープンスクールということがいわれ、実験されてきましたが、必ずしも成功したわけではありません。なぜかといえば、気持ちがオープンにならなかったから、建物の壁を取り払っても、結局アコーデオン・カーテンや、衝立などを使うようになってしまったという話も聞きました。

4番目は、学校開放というと建物の開放を考えますが、それだけではなく、地域、人の交流も図るということが重要だということです。例えば先生だけが授業をするのではなく、地域住民でいろいろな特技のある人が授業をすることをも考えられます。その人的交流から、保護者、地域住民に学校をオープンにしていく、これは教育への参加でもあります。現実にはそういうことは可能であるということが、私のお話しした事例からわかるのではない

でしょうか。

もちろんどこでも同じようにというわけにはいきません。地域には、それぞれの特色があります。2つの学校を見ても、伝統があって古くからのものが残っているところがありますし、一方で幕張のように新しく作り上げていくところもあります。ですから、打瀬小学校でやったことを白石小学校でやっても必ずしもうまくいくとは限りません。逆に、白石小学校のように伝統のあるところのものを打瀬小学校でやろうとしてもうまくいかないことがあるでしょう。学校の条件、あるいは住民の意識も違ってきますから。ちょっと固いことばを使いますと、「最適化」する、その地域というものについて最適な方法を考えながらやっていくことが必要です。正しい答えが1つあって、それをどこでも同じようにやればいいというものではありません。地域にある特性を生かしていきながら、地域と学校を開いてコミュニケーションしていくということ、「オブティマイズ」、最適化するということを考えていただかないと思います。

#### PTAという関わりを生かして

○二瓶由美子(元日本PTA全国協議会母親委員長)：私は、現在18歳になる娘が小学校4年生から6年生になるまで3年間、福島市の郊外、りんご畑がたくさんある田舎の小学校でPTA会長をしておりました。当時、女性のPTA会長は1人だけだったので、あちこちから依頼を受けて様々な会に出ているうちにいろいろなことに気づきました。私は東京都杉並区出身で、子どもの頃からPTA会長はお母さんと思っていましたので、推薦されたときに何の違和感もなく引き受けたのですが、女性のPTA会長は福島では非常に肩身が狭く、辛い思いをしながら3年間務めました。文部省の生徒指導の会議や学習会などに出たりする中で、私は生まれ育った杉並区と、今暮らしている福島市を考え、「日本って2つあるんだなあ」と思ってきました。今回の調査研究の中で、私自身のPTAというもののあり方への疑問、それから今後のPTAはどうあるべきなのかということ、私自身の経験も含めて考えてみたいと思ってこの仕事を引き受けさせていただきました。

さて2つある日本と申し上げましたが、今回私が調査をした事例も、1つは世田谷区の生活者ネットワークを基盤とした「子どもの放課後を考える会」に代表される事例で、都市型社会の中で子どもたちの教育にとって何が重要かと考えた母親たちが、PTA活動を出会いの場としてネットワークを作った事例です。あとふたつは地方型のといった

らいいんでしょうか、「地方」という言葉をとりあえず一番わかりやすい言葉として使わせていただきますが、子どもを介した出会いの場にはPTA、育成会、少年会、スポーツ少年団の親の会といったものが様々あるんですが、トップは男性で女性は手足というような古いタイプの役割分担をそのまま維持している地域の事例です。おとなたちの出会い、それから子どもたちの時間の過ごし方や生活のスタイルなども非常に違うものを感じています。文部省の会議でも、都市の子どもたちの生活時間は大変夜更かし型である、学習塾に通っている、その上お稽古事も多いと伺いました。福島市というのは中都市ですけれども、通塾率は、10%未満です。スイミングやピアノは遊びのノリでやっていますが、学習塾は繁盛していません。経営が成り立たないため潰れているのが実情です。ですから、元気に外遊びをしている子どもの比率は東京や大阪などに比べれば非常に高いと思います。それで大都会とは違う子どもたちの生活があるところを事例として調査しました。福島市から車で30分ほどの山間部、非常に標高の高いところの川俣町では田んぼをスケートリンクにしているという話しを聞きました。川俣町はかつて「絹の里」と呼ばれ、絹産業が発達した自然に恵まれたところです。そこで子どもたちは最近、テレビゲームに夢中で外に出てこない。それを心配した親たちが、子どもたちを外で遊ばせたいという思いで、町をあげてスケートリンクを作りました。スケートリンクの整備は毎日親たちがしているそうです。寒いところだからこそできることをした事例です。もう1つは、山形県のサクランボで有名な寒河江市です。社会教育の会で耳にした「田植え踊りの継承活動」を調査しました。この田植え踊りの継承活動には親たちがいろいろな形で子どもたちに関わっているのですが、PTAというのが出会いの場になっていました。

東京、福島、山形の3つの事例を調査して、第1にPTAの体質が都市部とそれから人口が非常に少ない地域では、色合いが違うということをあらためて認識しました。次に、子どもたちの生活や、それから親の子どもへの教育や学校への関わり方は、地域差があるにもかかわらず、子ども自身に内在する問題点としてメディアの問題は共通に見られるということに気がきました。地方に住んでおりますと、外遊びをしている子どもをよく見ますし、働きすぎの父親というのも少ないです。大企業で過労死するほど働くお父さんの比率が低く、父親がPTA、スポーツ少年団など地域活動に参加する率は高いと思っています。しかしメディアの影響で子どもたちの遊びが変質してい

ます。外遊びも、群れ遊ぶ子どもの数は減り、10人ぐらいの異年齢集団は、福島でも減少して2、3人単位になっています。しかも、2、3人で集まって、家の中でゲームをして遊ぶということがどの地域にも共通しています。だからこそ、文化の継承活動、あるいは田んぼスケートリンクなどを通じて子どもたちに体を動かしたり、それからふるさとに誇りを持てるような学習に触れさせることによって、何か大事なものを伝えたいという親の思いを感じました。もちろん都市型である世田谷の「子どもの放課後を考える会」の活動も共通するものがあります。それは、放課後、子どもたちが群れ遊ぶような遊び方を取り戻したいという親の持つ強い思いです。

私はPTA活動が地域共同体型社会と都市型社会では大きく異なるという認識を持ちましたが、同時に、情報化とメディアの発達によって子どもたちの遊びの変質は同様なものがあることに気がきました。この2点を通して考えると、今の子どもを解決していく方法の1つとして、おとなたちの関わり方が大きな鍵になっていると思います。しかし、おとなたちの関わり方は全国的に見て、非常に低温体質になっているようです。一般に地域共同体型社会というのは、隣近所のことをよく知っている、隣のお嫁さんがきょうは何したかまで知っている社会だといわれていましたが、福島のような中都市では変わってきています。そういうおとなたちの関わり方をもう少し見直してみよう、というのがこの事例です。少しずつ疎遠になってきた様々な関わりを、PTAという組織で、いろいろな職業、いろいろな生活時間を持った親たちによって取り戻すことができるのではないのでしょうか。なるべく多くの親に協力を求めながらスケートリンクを維持する、あるいは田植え踊りの継承活動のために様々な知恵を出し親たちが協力しあう、というネットワーキングを感じました。現代社会では、都会であっても、田舎であっても、人の関わり方は薄くなっているかもしれません。だからこそ、何らかの出会いを通して関わりを持とうと強く願っている人たちと出会えたことが、今回の私の成果です。

子どもたちが集団で群れ遊ぶような元気な姿が見られなくなっています。この遊びの変容が、子どもたちの中に育てていかなければならないこと、例えばリーダーシップ、フォロワーシップ、集団の中でのルールを守る規範などを作っていないということに気づき始めた人たちがいます。このままではいけない、何とかしなくてはいけない、どうしたらいいのか、自分たちおとながもう少し体温の高い関わり方をして、それを子どもたちに伝えていこうじゃない

か、この3つの事例はそういう取り組みだったと思いました。PTAの問題は、さきほど申し上げたように、どちらかという、関わってきた私がいうのも何なのですが、地域のボス的存在がトップに立っているような悪いイメージもあります。しかしこのような悪いイメージを克服しながら、新しい形の出会いの場を通じて、対等なネットワークングの中から子どもの問題を一緒に考えよう、今までのような学校後援会型のPTAではなくて、ほんとうに親 (parent) と教師 (teacher) が一緒に関わりあえるようなものにしようという試みが、この危機的状況の中で少しずつ始まっているということを実感しました。「捨てたもんじゃないな。これからなんだな」と思いました。自分の子どもたちは成長しましたけれども、私も地域のオバサンの1人として、子どもの教育に関わっていきたいというのが、今回の調査を通して私が得た結論です。

### プレーパークとチャイルドラインについて

○天野秀昭 (世田谷ボランティア協会・プレーパーク担当専門員)：本業は、ここに書いてあるとおりボランティア協会の職員なのですが、プレーパークという子どもの遊び場づくりをやっております。今日は、プレーパークとチャイルドラインについてお話しようと思います。両方とも行政とパートナーシップを組みながらやってきました。

プレーパークというのは、「冒険遊び場」ともいわれています。どういうところかなかなか説明しづらいんですが、簡単にいうと禁止事項をすべて解除した遊び場です。「○○してはならぬ」ということが何もありません。火もたけるし、工作もできる。のこぎりやかなづちやナイフ等が置いてあるんです。ナイフ事件が起こってから、「子どもはナイフを持ち歩くな」という話になっていますが、プレーパークによく来る子どもは自分のナイフを持ち歩いています。自分のナイフで工作をするというのは当たり前のことです。木と木の間にロープを張って渡ったり、木の上に小屋があったりします。子どもが自分たちで基地も作れるし、穴も掘れるという遊び場です。そして、そのための道具とか工具の類が揃えてあります。

このプレーパークには大きな公園の一角を使うタイプと、独立した公園を使うタイプの2つがあるのですが、いずれにも3つ大きな特徴があります。1つは、地域住民が運営をしているということです。世田谷区内では現在3か所常設されていて、それぞれの地域の住民たちがそこを運営しているという形をとっています。2番目の特徴は、プレーリーダーと呼ばれる人間が常駐していることです。プ

レーリーダーというのは、直訳すると「遊びの指導者」ですが、適切な日本語がありません。僕らは遊びの指導者ではないと思っています。というか、子どもの遊びの世界におとなの指導者が入るとろくなことが起こらないと思っていますので、むしろ「遊び心を刺激する人間」「子どもの遊び心を誘い出すような人間」という感じでしょうか、平たくいえば、「ちょっと怪しいおとな」です。それで、「こいつはほんとうにおとななのか」と子どもが思う関係をつくっています。さきほどの「おやじの会」のオヤジと似ているかもしれません。3つ目の特徴は、これが行政の事業になっているということです。プレーパークは世田谷区の事業としてきちんと位置づけられていて、最低限の予算的な保障があります。子どもが本気になって遊ぶとなると事故や怪我の心配が起きます。役所が一番嫌がるのは、事故が起こったときの責任問題をどうするのかということです。公園なんていうのは何が起こるかわからないわけで、通常の公園が禁止事項がいっぱいあるのは、何か起こる前に止めさせてしまおうとするからです。その背後には住民たちの苦情がいっぱいあるのです。僕らは、最初、役所というのは「何でこんなに頭が固いんだろう」と思って付き合っていたのですが、いろいろ聞いていくと、その背後に文句をいう住民がたくさんいるということがわかってきました。相手にするのは役所じゃなくて住民だったのです。それで、僕らの活動を、住民を対象にして問題提起をするという方向に転換していきました。周りから問題があまり出てこないようになると、役所も文句をいわなくなるのですから。役所の背後に文句をいう住民がいたことに気が付いて、それを解決していったのですが、それがやれるのはやはり住民ではないかと思います。文句をいう住民に対して文句を言い返す役所というのはありません。もちろん役所のやれることと住民のやれることは、領分が違いますので、それをどのようにお互いに生かしあっていくのかということがポイントになるのではないかと考えています。

プレーパークが行政の事業になってから今年で20年になります。「何でこんなに続いているんだろう」と考えてみると、結局、プレーパークがおとなの居場所にもなっているということでしょうか。おとながやっていて楽しい、おとなが生き生きしてくる、そういう生き生きしてくるおとなたちといると、子どももまた生き生きしてくる、ということだろーうと思います。冒険遊び場の冒険たるゆえんというのは、おとなも冒険しているのだと僕は理解しています。

世田谷は人口が多く、76万人です。パブルで土地の値

が上がって流出しましたが、それでも大変な人数です。子どもの問題もいろいろ起こっています。今から3年前に大河内君が“いじめ”で自殺したことをきっかけにして、多数の子どもたちが同じような現象で死んでいくということがありました。それでこれは何とかしなければ、これ以上、子どもを殺していいのか、自ら命を絶っていく子どもをこのまま放っておいていいわけがないと「世田谷こどものちのネットワーク」が出来上がってきました。子どもに関係するいろいろな立場のおとながいます。学校の教師、塾の先生、フリースクール、もちろん親、僕らのように遊び場の人間もいるし、児童館、PTA、親子劇場等、いろいろな関わりを持っているおとなたちがいるのです。それまでは学校が悪いとか、家庭が悪いとか、地域の教育力とかいろいろいわれてきました。今でももちろんいわれていて、それぞれが問題を抱えているのは確かです。しかし、その犯人探しをやっていてどうなるのでしょうか。僕らの場合は立場が違うからやれることが違う。立場が違うからこそその分野からやれることを互いに探り合えばいいのではないかと考えました。ネットワークの趣旨はそこにあります。「学校になんか行かさないほうがいい」というフリースクールの経営者と学校の先生が両方ともネットワークに加わっているの、ときには意見がぶつかり合いながらも一緒にやっているというわけです。この民間のネットワークで3回の「いじめよ、止まれ」というシンポジウムを打っていったのですが、この中で行政がティアップしました。行政にとっても教育委員会にとっても、“いじめ”の問題というのは非常に大きな問題だったのです。民間の側からこうした動きが出てきたということ行政が受け止めて、場所と資金の提供という行政のバックアップで3回のシンポジウムが実施されました。

この3回のシンポジウムの中で、話し合っているばかりでなく、なにか具体的なサポートシステムが作れないかという話になりました。そこで浮上してきたのが、24時間の電話相談「世田谷チャイルドライン」です。「チャイルドライン」というのは、実はイギリスに本家本元があって、10年前からやっています。それで、イギリスへ行って、「チャイルドライン」がどのようなことをやっているのかと視察してきました。それを日本に持ち帰って、「何とか日本でもできないだろうか」ということで模索が始まったのです。

僕たちの代表は今、牟田悌三さんという俳優がやっているのですが、彼は中央教育審議会の委員をやっています。またネットワークに関わっていた人の中から衆議院議員が1人出たということがあって、いきなり国との関係が

近くなりました。それで、イギリスの「チャイルドライン」を日本に呼べないだろうかということで、文部省に働きかけをした結果、文部省が国際シンポジウムを開くという形で「チャイルドライン」のメンバーを呼ぶことができたのです。相談事業をどうやったらいいかということ、文部省も考えていたところだったので、国際シンポジウムを開いて、そのついでに世田谷でも国際シンポジウムを開くというやり方をしました。このような布石をいくつか打っていきながら、3月に「世田谷チャイルドライン」を2週間だけ試験的に発足させました。「世田谷こどものちのネットワーク」というのは僕も含めてどこの馬の骨かわからない住民たちの集まりですから、役所としては一緒に組んで事業を実施する上で難しいこともありました。けれども、「世田谷チャイルドライン」をやるという「こどものちのネットワーク」からの提案を受けて、世田谷ボランティア協会という社会福祉法人がそれを主宰するという構造を作ったことで、世田谷区役所も組織的に組みやすくなりました。世田谷ボランティア協会と教育委員会が組んで、「世田谷チャイルドライン」を立ち上げ、実質的にはネットワークのメンバーが運営するという形をとりました。

プレーパークも世田谷区の事業で、世田谷ボランティア協会に委託し、実際に運営するのが地域住民たちという似た構造になっています。自分たちの生活課題に取り組んでいこうとすることを行政がどういう形でバックアップしていくかという具体的なことは質問していただければ答えます。

### パネリスト間での意見交換

○天野(正)：いまお互いの発表を聞きまして、いろいろと疑問がでてきました。それで、今からしばらくパネリストの間で疑問や意見を交換してから、会場の皆さまのご意見、ご質問を受けたいと思っております。

○清水：二瓶さんにお聞きします。PTAに対する無関心がいろいろな学校で問題になっていますが、地域差があるのか、それからそのPTAはこれからどうなるか、現状の問題と予測があったらお聞かせいただきたいと思います。

○二瓶：PTAの連合会から脱退するPTAが出ていて、数年前から危機的な問題だという人もいますし、東京周辺の新設校では、PTAという組織自体を持たない学校も増えています。あまり人と関わりたくないという親や先生が増え、それからPTAそのものがほんとうに親と先生が協議する場として機能してきたかどうかという疑問から、「こういう組織はもうなくていいんじゃないか」と諦められ



ているなどいろいろな理由からPTA離れは進行しています。特に都市の周辺部に見られる傾向だと私は考えています。それでもやはりPTA活動を大切にしたいということで、いろいろな試みを実践している事例報告は全国各地にあります。

それから、私の暮らしている福島県の会津の山間部では過疎化が進行していて、PTAはどうなるのかという心配もあります。福島市の奥に土湯温泉という温泉があるのですが、ここの土湯小学校も子どもたちの数が少なくなっています。「どうしているのですか」と聞いてみると、全員がPTA役員にならないと機能しないので、父親も母親も全員参加だそうです。それで、わが子だけじゃなくて、ほかの子どもたちとも関わることになります。PTAだけじゃなくてスポーツ少年団も同じようです。つまり人数は少ないんだけど、少なれば少ないだけ関わり方を深め、何とか地域社会の中での人の繋がりを大切にしているのです。いずれにせよ、おとなたちがしっかりと友情を深めていくことが大事なのではないのでしょうか。



○天野(正)：その関わりで、清水さんに質問します。建物が変わると行動が変わるという非常に興味深い報告でしたが、その2つの学校の事例の中で、PTAはどういう役割を果たしているのでしょうか。

○清水：実は幕張は今、批判された典型で、PTAはありません。例えば世田谷のようにボランティア活動が盛んなところは、ボランティアで代理すればいいのだろうか、ボランティア活動が盛んだといわれながらもPTA活動が衰退しているのだろうか、という疑問をもちました。幕張でも、親は一生懸命関わっていろいろなことをやっているわけです。PTAというと従来イメージが大変強いのかもし

れません。これまでの伝統的な行政が考えたものを下ろしていくようなPTAのやり方ではうまくいかないのではないのでしょうか。住民の内発的なもの、あるいはPTAを含む保護者の内発的なものをもっと刺激するような形で、プレーリーダーだけではなく、PTAリーダーのようなものが必要なのではないのかと考えました。

○天野(正)：重要な問題提起です。PTAが力を失いつつある一方で新しいネットワーク型ボランティア活動への関心が高まっているという現実をどうとらえていくのか、ということですね。天野秀昭さんの報告を興味深く聞いたのですが、行政と民間の関係がほんとうにうまくいっているのか少し疑問を持ちました。先程、「立場が違うとやることも違う」といわれましたが、もう少し行政と民間の関係についてお話しください。

○天野(秀)：基本的には行政は困っているのかもしれませんが。「プレーパーク」も「チャイルドライン」も行政からすれば痛いところが多いのです。先頃、横浜で教育委員会がやっている、子どもの悩みを「何でも聞くよ」という電話相談に、子どもが自殺予告を入れるという事件がありました。教育委員会は慌てて学校の先生にそのテープを聞かせて、子どもを探そうとしたのですがわからなくて、結局子どもの声をマスコミで流すということが起こってしまいました。「チャイルドライン」のようなことをやろうとすると何が起こるかわかりません。例えば教師の体罰の告発や、セクハラなどが出来たときに、それをどうしてくれるのかという話になると、教育委員会では、そこまで体制ができていません。そうした問題が起こることを考えると、「寝た子を起こしたくない」というのが役所の一方の正直な気持ちでしょう。けれどそれをゆさぶるのが住民の役割ではないかと僕は思っています。生活課題というのは、生活している人間の中から出てくるのが一番実感があるわけですから。

また、行政には縦割という特徴的な構造があります。縦割をとっているが故に専門的な対応ができるというメリットもあるわけですが、縦割でしか動けないという硬直した組織形態になりやすいというデメリットもある。縦割というやり方では人間を人間として扱えないと思います。同じ子どもについても、学校の面、衛生面、福祉面などいろいろあって、担当がそれぞれ違いますから、1人の子どものために1人の子どものように扱うことができない構造になっているのです。行政のほうは横にネットワークを取ることが出来るようになると、たぶん住民の動きにもっと柔軟な対応ができるようになるのではないのでしょうか。例え

ば「チャイルドライン」とか、「プレーパーク」などをやるときには、関係する各課が横に連絡を取って、「チャイルドライン」係といったようなものを作ってしまう。それぞれの課が入っているから、そこで起こったことについては、各セクションに落としていくといった構造がこれからの行政に必要なんじゃないかと僕は思っているんです。そうすると、かなり人間をとらえることができるというか、血の通った行政が出来てくるんじゃないかと思っていて、その係は、世田谷でいえば区長とか助役ぐらいの政策を決定していくトップの直轄とすれば、政策の中にきちんと位置づけていけるのではないかと考えています。問題を専門的に扱えることが出来るのが行政で、幅広くしかも生活課題としてとらえることができる、小回りが効くというのが民間の特徴です。例えばプレーパークでは、事故が起こったときに、その住民たちが自分たちで責任を持って事故が起こった相手に対応をします。当然いろいろいってくる親も中にいるわけですが、そのときに、住民たちが対応すると柔軟な対応が可能です。行政がやっているけれども、行政が責任を持っているのではなく、住民たちが責任を持っているという実績があるものですから、行政側も運営を任せられるのではないのでしょうか。

役所の職員も家に帰れば住民のはずなんですけれども、住民と行政は不信感を持っています。住民は「役所がやることは」みたいな感じを持っているし、住民が何人かで役所に行ったりすると、「陳情だろうか」と役所も身構えてしまいます。お互いに少し解きほぐしながらやっていく必要があります。

○天野(正)：この問題はこれからも議論を深めていくべき課題ですね。

○二瓶：天野正子さんに質問です。私の住む福島では、りんごや桃の農家が多いからお父さんが子育てや、PTA活動や地域の活動に関わられたんだと思います。でも私の連れ合いは県職員で、子どもたちが小さかったころは予算を担当して、子育てには関わっていませんでした。私がPTA会長をしているとき、本当に1回だけ子どもの参観日に学校に行ってもらったことがありました。ちょうどその日は年度初めで、クラスのPTAの委員を決める日だったのですが「私はできません。」と言う人が多く、何も知らない私の連れ合いは、「厚生委員も教養委員も何とか委員も、全部うちの女房にやらせます。どうせあいつ、PTA会長ですから」っていったのです。先生が慌てたそうですが、地域のことや家庭のことはすべて妻まかせという人は多いのではないのでしょうか。こうした経験を考えると、「すぎ

のこおやじの会」のお話を聞いたときに、会社での働き方が変わっていかない実情の中で、父親たちはどのように変わっていきけるのか、会社が変わらなくて父親が変われるのか疑問を持ちました。

○天野(正)：実は私も「すぎのこおやじの会」に同じような質問をしました。「会社での男性の働き方が変わらない現実のなかで、この会は特殊なケースといえるのでは？」という質問への返事はこうでした。「これまでも、企業組織、企業文化が変わらなければ男の生き方は変わらないといわれつづけた。でも、それを待っていたらいつになるかわからない。自らの精神まで会社に規定されているわけではない。自分の視線や意識を社会の外にむけ、自分自身の世界を育てる。それは、だれでもその気になればできることだ」と。

もう1つ印象的だったのは、あるメンバーが、「今が絶好のチャンス。これまで従業員的生活を丸抱えてきた企業コミュニティが揺らぎ始めている。一方で休日が増えたり、時短も少しずつ進んでいる。何よりも男性にとって定年退職後の生活の不安が共通の認識になりつつある。とすると、今がチャンスですよ」といわれたことです。企業組織や会社での働き方を免罪符にはできない時代を私たちは生きているのです。まず、働いている男性1人1人が会社との距離を自分で再点検していく。会社に対する幻想を持たないほうがいい。山一とか北海道拓殖銀行の例にみるように、企業はもう永遠ではありません。その意味では既存の秩序が揺らぎ始めたこの時期こそ、「男性の1つの変わり目である」と言うメンバーのことは、私はそのまま二瓶さんにお返ししたいと思います。

## 質疑応答

○中野：それでは今から質疑応答の時間にします。

○女性1：連れ合いが副PTA会長をずっとやっています。学校のサマーフェスティバルで、キャンプファイヤーをやりました。校庭で火をたくことも、消防署などと打ち合わせの上で実施出来ました。でも同じ区でも別の学校では校長先生からもOKが出ませんでした。千葉県の打瀬小学校では、どうしてこんなに素敵なことができるのかその背景をお聞きしたいと思います。

○清水：実は僕も行って驚いたんです。なぜできたかといえば、第1に校長先生の頭がオープンだからです。僕は建物の話をしましたけれども、頭が開放されていないと難しいと思いました。もう1つは、「主役は誰なのか」を考えることが必要だということです。学校の先生でも親でも

なく、やっぱり主役は「子ども」なのです。打瀬小学校でこんなことがありました。卒業式のとき歌を歌うか、歌わないかで、職員の意見が分かれたそうです。校長先生もどうしていいかわからない。それで「子どもに聞いてみましょう」ということになって、結論は子どもが出しました。子どもに話し合わせて、投票させて決めたそうです。それを聞いたとき、僕は「偉い先生だな」と思いました。学校の中で大事なのは子どもなのですから、子どもの意見を尊重するのが原則です。もちろんその背景には、普段から学校に保護者が関わっていることがあると思いました。

○二瓶：今のご質問に関連して、ちょっと素敵なことを紹介します。福島県の中に、三春町っていう、滝桜で有名な町があります。ここの中学校にはベルがないんです。始業ベルも終業ベルもなく、これはもう教育改革です。普通の公立の中学校ですよ。それで、英語の授業を始めると、校長先生や英語の先生が来て、生徒たちの前で自由な会話をするんです。生徒たちはグループに分かれて、それぞれ、単語について勉強したいグループ、英語の会話について勉強したいグループなど、共通の問題関心を持ったグループを作って、自主的な授業を始めるということを新聞で読みました。私はもう20年も福島に暮らしていますが、「保守的だし、雪も降るし、嫌だな。早く東京へ帰りたい」と思う日もあります。こういう記事を見ると、「やっぱりここに骨を埋めよう」と思います。おとなが仕掛け人になって、子どもに愛情を注いでいると可能になるとあらためて感動しました。主役はもちろん子どもですが、その主役を大切に愛情というものが道を開くと思います。

○女性2：20年前ですけれども、私は千葉県の船橋市の高根台というところにおりました。PTA活動がとても盛んな学校で毎月、保護者会がありました。意見を出しにくいということはありませんでしたし、いい学校だと思っておりました。それからもう1つ、校庭を貸していただけないということですが、私の地域の学校でこんなことがありました。以前は野焼きなどで火をたいっていたのですけれども、校長先生が代わったら、校庭を貸して貰えなくなると聞きました。それで、私は聞きに伺いましたら、何千万円もかけて、校庭を整地したばかりだったのです。そういうときもありますので、一概に決めつけないでお聞きになったらいいと思います。

○女性3：群馬県のある村には隣保館という同和対策で作られた施設があって、小学校の子どもたちが学校の帰りにいつも寄って、勉強したりお話をしたりする溜まり場になっています。その村の住民、子どもたちがなじみや

すような工夫として1年1回の夏の祭りという、大きなイベントがあります。子どもたちが自分たちで企画して、様々な活動をやる。中学生になって、部活なんか忙しくなっても、小さいときになじんだ隣保館に、お姉さんお兄さんとして下の子どもたちにリーダーシップを発揮していて、異年齢集団が自然と作られているという感じがしました。こういうところを常に用意しておくことが必要です。先程、校長先生の良し悪しというお話がありましたが、その館長さんは、私が行きましたら、エプロンを着けてお茶を入れてくださり、開かれた心の持ち主だとお見受けしました。

○男性1：天野先生にお伺いします。「おやじの会」では、おとなが子どもたちと一緒にやっているということはよくわかるんですが、子どもたちの自主性はどのようになっているのでしょうか。

○天野(正)：「居場所」の条件として子ども自身が主役であることが大切ですが、「いま」という時代、そうした空間が自然発生的に生まれてくる基盤はありません。逆説的ですが、そうした条件をおとなが自覚的に作り出す他ありません。

ところがさきほど“低温体質”という話がありましたが、それはおとなだけではなく子どももそうなのです。例えば横浜市から田んぼを借りて無農薬米を作って餅つきをして、団地の中の高齢者にふるまうことを年中行事としていますが、最初は、一生懸命田植えをしたり草取りをするのはオヤジさんたちで、子どもたちは遠巻きにして、「よくやるなあ」と、うさんくさそうに見ていたっていうんです。それを1年やり、2年目になると、1人入り、さらに数人と広がったそうで関係をつくるまでに時間がかかります。資金稼ぎのバザーも何年間かやっているうちに、そこからみるとだれとだれが実の親子かわからないくらい社会的なオジサンと子どもの関係がつけられるのですが、そうなるまでに数年はかかるのだそうです。イベントをパッとやってパッと別れるという形ではなくて、関係づくりというのは、息の長い仕事だと思います。そのためのいろいろな仕掛けが必要なのです。

私が出会った事例調査のなかで、「うまくいっているなあ」と思ったのは、沖縄県浦添市内間地区の青年会と子どもの関係です。青年会は、その地区で22年間途絶えていた「エイサー」という伝統芸能を復活させました。そのエイサーを次の世代に伝えたい、という熱い思いで小学校の体育館を借りて子どもたちへの猛特訓をつづけてきました。初めの頃は、子どもたちもおそろおそろ参加して

くる。エイサーをご存じの方はおわかりでしょうけれど、大太鼓や、パーランクーなどを使った勇壮な踊りです。それを見ているうちに格好いい、自分も躍りたいと、ほんとうに1人入り、2人入り、次第に子どもの輪ができる。それに夜ですから、遅くなると父母が迎えにきて、一緒に踊り始める、教師も帰る前にちょっと顔を出す。エイサーといういわゆる伝承芸能を1つの媒介として、青年と子どもが結びつくんです。

この青年というのがすごくいいんですね。先程話しましたナナメの関係です。子どもたちにとっては、社会的な兄貴や姉貴なんですね。青年会の若者たちの多くは、いわゆる優等生ではありません。いじめられた経験や、傷跡も深く残していますから、そうした子どもの対人関係のデリケートな部分にも思いやることができる。また、子どもにとって青年という存在は自分が越えていかなきゃいけない身近なモデルです。沖縄では青年が仕掛け人としていい働きをしておりました。それでもすぐに「いい関係」になるという保証はない。まず子どもの名前を覚えるという個別識別からはじまり、ゆっくりと。本当に関係作りには時間がかかります。

○女性4：私は、子どもの居場所ということに前から関心を持っていたので、保健室登校が今ほどいわれていないころ、保健室に一日中座っていたことがあります。そこで、「ああ、これは子どもはほんとうに居場所が必要なんだ」と考えたことを思い出しました。それからいろいろな場所に行くようにしています。世田谷の羽根木のプレーパークに1日座っていると、たくさんのことがわかりました。お昼になると、ひとりの少年が火を起こして、ラーメンを作って、私に「1杯、70円で買え」というんです。「いや、おばさんは弁当持ってきているから買わない」と答えると、今度はそのプレーリーダーに「ウッキー、70円で買えよ」といったやりとりが続きます。真っ黒な手でむいたゆで卵のはじっこをちょっとくれました。そのときあらためて「私の子どものときにはあった遊び場が今までなかったんだ」と考えさせられました。なぜ彼らはプレーパークや保健室に来るのか、と考えたときにひとつ思いあたりました。それは、子どもを点数で評価しないことです。勉強できる○ちゃん、ピアノができる○ちゃんっていう評価をプレーリーダーや保健室の養護教諭もしていませんでした。評価をしないおとなに大きな存在意味があると思います。ほかにも子どもの居場所としては、杉並区に去年完成した「中高生のための居場所」があります。私は、計画の段階から興味がありましたので行って見ましたら、思春期の

子どもたちの居場所になっているようでした。子どもの居場所になるためには、そこに管理はしないけれども信頼できるおとながいるかどうかということが重要です。子どもたちはよく見えていますから、そのおとなが自分に正直に生きているか、正義感が強いのか、子どものほうを向いているかが問われます。私は、行政がいろいろなものを仕掛けていくことにとても賛成です。今や家庭にも地域にもその能力はありませんから、ユース杉並や世田谷の児童館の活動のように行政が支援することに賛成します。でも、おとなが変わっていくことも忘れてはならないと思います。ところで、天野さん、「チャイルドライン」を実施した期間、回答者などについて教えてください。

○天野(秀)：「チャイルドライン」、24時間対応できる電話として、3月の8日から21日までの2週間という期間限定で実施しました。はじめる前から簡単ではないとは思っていましたが、やってみると、思った以上に大変でした。けれど、その2週間で電話が1069件来たのです。世田谷区の公立小中学校に電話番号を配る、区内の掲示板に張るといぐらいの広報しかなかったにもかかわらず1069件です。その中で感じたのは、「こんなことも話す相手がないんだ」ということです。「チャイルドライン」の基本的な姿勢とは、子どもの声を聞く、そして、子どもが何をいおうしているのかその心を受け止めるということでした。きちんと受け止めるおとながいさえすれば、子どもは自分で問題解決を図る力があるのです。だから僕らは相談という言葉なるべく使わないようにしています。相談というとその人が解決してくれるような印象を与えますから。そして、「子どもが話す24時間電話「チャイルドライン」」というのを表に出したんです。

相談員の人たちは公募です。「いじめよ、止まれ」のシンポジウム、イギリスから「チャイルドライン」を呼んだときにそのシンポジウムに来た人が、延べで1000名ぐらいいたので、その人たち全員にダイレクトメールを出したところ、80名ぐらい応募がありました。その後、慌ただしい中で「命の電話」にお願いして9回の研修を組みました。「命の電話」は長い実績があって、通常2年間ぐらいかけてトレーニングするのですが、「何とか全9回でやれないか」という無茶なお願いをして、何とか9回でやれる範囲のトレーニングを実施しました。それで1日24時間ですから、4時間で1つシフトを組むという形で、6交代です。電話は2回線引いていたのですが、2人では記録が取れないので、大体3人から4人のチームで順番に電話を取っていくというスタイルをとりました。

○中野：この24時間の電話相談のことについては、資料の中の中央教育審議会「幼児期からの心の教育のあり方について」(中間報告)をごらんください。24時間子育て相談に対応できる体制を地域社会の中から作るということがあげられております。では最後に先生方から一言ずつまとめのご発言をお願いします。

#### まとめ

○天野(秀)：行政と住民とがパートナーシップを組んでいくというのは、そんなに簡単なことではありません。住民たちがいろいろな問題を持ち込むことを面倒くさがることもあります。住民はいろいろな立場や生活をしているので、それぞれが価値観を持っていて、もしそのベクトルを全部行政にぶつけたら行政としても答えようがありません。

だからそのベクトルを、一度自分たちの地域の中で、住民同士でもんでいく必要があると僕は思っています。例えばプレーパークにも「あんな汚い危ない遊び場」、「いる人間も怪しい」などと反対する人もいます。しかし、そのような声も含めて、子どもの育つ環境をどうしていくかということを地域の中で考えることも重要で、地域から出たことを行政にぶつけていけば、行政のほうも動きようがあるのではないかと思います。住民たちも知恵を付けなければならないし、行政のほうでも住民が動き出したときの受け皿をどのように作るかということを考える必要があります。自分たちで何かやりたいと思っている人はたくさんいますから、それを支えていくような構造が行政の中に出てくると、いろいろなことができるんじゃないかという可能性は感じていますし、これからきっとそういう時代に入っていくだろうと思います。

○二瓶：私は今回の調査と本日のシンポジウムを通して、私たちが抱えている問題の原因というのは、都市化の進行による弊害、さきほど申し上げたおとなと子どもの低温体質、それからわが子さえよければいい、わが家さえ幸せならいいという孤立化した家庭の増加、それから核家族化の進行の結果としての子育て機能が低下という3点だと思います。

ではおとなたちでどういう関わりを持っていくか、私は3つ提案をしたいと思います。第1に、私は生まれ育った東京と住んでいる福島を比較をしながら考えてきましたが、この際、都会と地方、お互いのいいところを見習いあうことができないかということです。この会場の中にも山村留学とか、福島県の小さな村との交流といった機会を思いつく方がいらっしゃると思います。次に、市民として

の姿勢ということです。私はこのシンポジウムのはじまりに結構緊張していました。いつも文献でお世話になっていた天野正子さんや都会人の代表のような天野秀昭さんと同席したからです。でもこうして席を並べてお話してみるとみんな市民の1人で、いろいろな立場から子どもたちに何が必要かということと一緒に考えることができました。PTAにおいても、親も先生も1市民として、子どものことを一緒に考えようとする姿勢が大事だと思います。最後はPTAについてです。PTAは子どもが卒業すると会を脱退しますので、一時的な関わりです。全国的に見れば、日本PTA全国協議会は男社会で古い体質を残しています。だからPTA離れも進行していて、私も抜本的改革など頑張ったんですけども、なかなか大変でした。でもそんなに難しく考えないで、出会いの場として、その後もネットワーキングを生かして活動していけるような場として、考えたらどうかと思うようになりました。既存のPTA組織に固執することなく、楽しい出会いの場にして、それを機能させるという発想も大事かと思っています。



○清水：家庭とPTAとそれから住民の関わり方から学校を考えると、キーワードは2つあります。ひとつは、オープン=開くということ、それからもう1つはオプティマイズ=最適化することです。オープンにするためには、情報交換するということが出発点になります。それで、学校便りをみんなに配るのだという実例をお話ししたわけです。学校と地域住民との相互理解を深めることが、結果として学校が地域社会を作っていくことになるでしょうし、地域社会の力を学校に取り入れていくことになります。

ただ、さきほどのご質問のように、なかなか思うように

いかないところもあります。その地域地域の特性というものを生かしてやっていくしかないと思います。学校も子どものことを考えて行動しているわけですから、例えば先程の火にこだわらなくても、何とか別の形で実現できないだろうかと相互に話し合うことで、1歩進むのではないのでしょうか。

できることから始めればいいんだと思います。何も大きな目標があって、〇〇のためにということではなく、天野さんのお話にありましたように、親が楽しむことから始めれば子どもが入ってくるということです。もちろん時間はかかりますが、あまりお金もかからないし、難しいこともない簡単なことですので、どこでも可能ではないかと思っております。

○天野(正)：私がいいたいことを皆さんがいつてくださいましたが、大切なことなのでもう一度繰り返しますと、1つは、まずおとなが変わらなければならないということです。「私のもの、私の子ども」という親の内なるわが子意識をゆさぶり、子どもに仲間と群れあい、地域のおとなとのナナメの関係を結ぶ機会をつくるには、なによりもおとな自身が群れあい楽しむこと。そのことをもう一度確認する、そこから何かが始まるのではないかと思います。2つ目は、私たちは、地域という生活空間の大切さになかなか自覚的になれない。私の世代にとって地域というのは閉鎖性の温床としてのイメージが強いのですが、その側面だけではなく、地域って、もともと眠る・食べる・排泄する・つき合う・学ぶという具体的な生活課題がよく見えてくる生活空間なのです。家庭や職場という空間からは見えないものが地域という空間から鮮明に見えるのです。先程、天野秀昭さんが、「やっぱり生活課題を抱えている者が強く、そこから行政に働きかけることができる」といわれましたが、生活課題が鮮明に見えてくる空間としての地域、男にも女にも、老後の受け皿となる地域、子どもの自己成長の場でもある地域の大切さをあらためて私たちは確認したいと思います。最後に、地域の教育力の活性化を進める媒体は、いろいろあるということです。さきほど沖繩のエイサーという文化伝承の事例を紹介しました。ちょっと文脈はずれるのですが、私たちの事例研究のなかで、「食」と「夜」というキーワードが出てきました。シラけた子どもにも「夜はわくわくする」という感性がまだまだ残っているのです。「夜」を1つのキーワードにして、例えば「ナイト体験ウォーク」という夜の体験の共有によって、子どもとおとなの関係が縮まるというような報告がありました。結びつく媒介になるものに着目していくと、いろいろな

のがあってしょうね。それが地域の教育力の活性化につながる可能性をもっている。きょうのシンポジウムは、地域で活動している方やこれから活動を始めたいと思っている人たちがお集まりになっていると思います。私たち1人1人が仕掛け人となってできるところからはじめる。そうでなければ生活共同の場、あるいは子どもの成長の場としての地域が新たに生まれることはない。おとなが子どもに「できること」はせいぜいそれくらいのことではないのでしょうか。きょうのシンポジウムが何かのきっかけ、手掛りになればいいなと願っております。